

活動報告

明治期日英交流の一断片―「日本水兵の母」の墓をめぐる―

はじめに

英国・ロンドンの中心部から二〇キロメートルほどの郊外に、「ウッドグレンジ・パーク」(Woodgrange Park Cemetery)という墓地があり、その中に一基の墓がひっそりとたたずんでいる。墓碑にはMiss M. McLeanと名が記され、また命日は一九〇四年(明治三七年)九月一三日と刻まれていたが、それから一世紀以上の時が経過するうちに、誰も墓参することのなくなってしまう墓である。

同墓地の管理人は、好意でこの無縁墓を自主的に清掃し、手入れしてきた。しかし現地の法律において、無縁墓は墓地の管理者の裁量で撤去できることとなっており、事の次第によつては将来撤去に至る可能性があった。しかも、その墓があるのは近年宗教系の団体が敷地を買収していた一角でもあり、そうした区域にある無縁墓は、クレームの対象になかなかねなかった。

このように「マクリーン」氏の無縁墓に対する措置の検討が迫られていた状況のもとで、管理人は同墓に「大日本帝国海軍の士官及び水兵によつて建立(erected by officers and sailors of the Imperial Japanese Navy)」と記されているのを見て、これが日本にゆかりの

ある墓ではないかと考えた。そして、在英国日本大使館に対して情報提供を行ったのが、令和元(二〇一九)年九月末のことである。

情報提供を受けた在英国日本大使館では、墓に書かれた情報と墓地の管理人が独自に調査した新聞記事から、マクリーン女史に関するわずかな情報を得ることはできたものの、対応方針を検討するに足る材料には乏しかった。そこで、在英国大使館がマクリーン女史に関するさらなる手がかりを求めて外交史料館に対して問い合わせを行ったのは、翌令和二年一〇月のことであつた。

一 マクリーン女史叙勲の経緯

在英大使館から提供された情報及び写真(後掲)を見ると、確かに命日は一九〇四年九月一三日であり、墓の土台部分に「宝冠六等マクリーン女史墓」と刻まれていることに着目して所蔵史料を調査した結果、マクリーンへの叙勲に関する文書を、外務省記録「外国人叙勲関係 英国之部」第六卷(6.2.1.5-5)から見つけることができた。同記録から判明した叙勲の経緯は以下の通りである。

明治三五（一九〇二）年

九月二九日 在英国大使館付玉利親賢海軍武官より林董駐英公使に對して、マクリーンの叙勲推薦書が提出された。

一〇月九日 林董駐英公使から小村寿太郎外相に宛ててマクリーンの叙勲申し立てがあつた。

十一月二日 内閣賞勲局から外務省に對して、同局内では叙勲に對し異存なき旨を内報した。

十一月二七日 小村外相より山本権兵衛海軍大臣に宛てて、マクリーンの叙勲に異存がないかを確認。翌二八日、海軍省から叙勲に同意する旨の回答があつた。

一二月三日 小村外相より桂太郎内閣總理大臣に對して、マクリーンの叙勲を上奏。

（なお、国立公文書館所蔵の「叙勲裁可書」にも記録が残っており、これによるとマクリーンの叙勲は明治三五年一二月一日に内閣から裁可された。¹）

明治三十六年（一九〇三）年

三月二一日 小村外相より山本海軍大臣に宛てて、マクリーンの叙勲決定を通報。

三月二六日 小村外相より林駐英公使に對して、マクリーンに對する勲章送付の通知と手交の訓令。

五月二九日 林駐英公使より勲章受領の通報。

七月一〇日 小村外相より林駐英公使に對して、勲記送付の通知。

八月一五日 林駐英公使より、マクリーン本人への勲記伝達を報告。

（なお、これ以前の記録はマクリーンの名を「エム・マクリーン」または単に「マクリーン」と称しており、八月十五日付の勲記伝達の文書においてようやく、「マーガレット・マクリーン」と、ファーストネームも含めて表記される。）

外務省記録に収録されたマクリーン女史の叙勲申立書（右記の明治三五年一〇月九日付文書）には、玉利駐英海軍武官による推薦の上申書が添付されている。そこで玉利武官は、英国に來航した日本海軍艦船の乗組員がいかにしてマクリーンの世話を受けたかを述べている。その口上は以下のとおりであつた。

マクリーン女史ノ為メニ相当ノ表彰御詮議相成度義ニ付上申
吾ガ海軍上下ヲ通シテ苟クモ一タヒ英国ニ渡航セルモノ誰カハマク
リーン女史ノ名ヲ知ラサルモノアルヘキ思フニ女史ノ名今ハ弘ク喧伝
セラレテ好シヤ身当国ニ來リ親シク女史ノ温容ニ接セズト雖モ恐クハ
其名ヲ聞ヒテ其人ヲ想思セサルモノアラサルベシ蓋シ女史ガ外国ニ於
テ製造セル吾々軍艦水雷艇逐艦回航ノ為メ渡英セル幾多下士卒ノ為
メニ尽セル親切ハ実ニ能ク筆紙ノ及フヘキニアラス現ニ頃日英皇戴冠
式參列ノ為メ來航セル浅間高砂ノ二艦ニ對シテモ敢テ前後厚薄ノ差ナ
ク東奔西走洽ク女史カ施セル同情ノ念ハ上司官ヲ始メトシ下一卒ニ
至ル迄必スヤ深く感謝ノ意ヲ表セラレタルナルヘシ其身矍鑠ナリト雖

モ輪既ニ古稀車馬駱駝看摩般擊ノ倫敦市中自ラ率先徒步ニテ數百ノ下士卒ヲ案内スルカ如キ或ハ數百哩ヲ遠シトセスシテ北ハ新城グラスゴー西ハプリマス或ハポーツマス、シヤネスサウサンプトン何レノ時何レノ場所ヲ問ハス苟モ吾カ軍艦ノ碇泊シテ下士卒ノ集合スルアルヤ到ル処未タ嘗テ女史ノ足跡ヲ見サルナシ

其他吾カ海軍下士卒ノ行為儉讓ニシテ訓練アル其愛國至誠ノ熱情ニ対シテハ自著ノ書籍雜誌ノ寄書ニ屢々之レヲ賞揚紹介スルカ如キ將タ又女史往年其居ヲ移シテ今現ニ市外チルベリーニ住ス曰ク是レ日本郵船会社汽船ノ入着港ニシテ吾カ兵員ノ為メ相互便益大ナルカ為メナリト其居ル処ヲ称シテ日本基督教會 (Japanese Christian Institute) ト云フ以上數ヘ來ル処皆是レ豈ニ吾カ帝國ニ対スル同情ノ念極メテ深厚ナルト共ニ博愛慈善ノ為メニハアラユル總テヲ犠牲ニスルノ熱心タルニアラサレハ焉ソ能ク此ノ如クナルヲ得ヘキ女史自ラ日本水兵ノ親友 (Japanese Soldiers' Friend) ヲ以テ任シ幾万吾カ海軍ノ下士卒ハ女史ヲ呼フニ其名ヲ言ハズシテ慈愛ナル母 (Dear Mother) ト云フ慈愛ナル母日本水兵ノ親友靈聲ノ通スル処此ニ語ハ以テ千萬言其功德ヲ表彰スルニ優ルモノアルヲ信ス別紙時事新報紙上 J. K. 生遣英艦航海記水兵ノ母ナル記事及日本ニ水兵ノ母ナキヤノ社説ハ共ニ能ク其意ヲ尽シテ頗ル同感ニ堪ヘサルモノアリ茲ニ併セテ高覽ニ供スル所以ナリ女史カ道心堅固ナル基督信者タルハ敢テ疑ヲ容レサル処ナリト雖モ其言動ニ徴スルニ一種普通ノ所謂基督信者ト其趣ヲ異ニセルモノアリ女史ノ吾カ海軍下士卒ニ対スル躬行実践極メテ広キ意味ニ於テ慈善親

切ノ間ニ他ヲ高尚融化セントスルニアルガ如シ蓋シ女史ノ為ス処ハ唯一点麗ハシキ慈愛ノ信念ヨク湧出スル顕象ニ過キスシテ敢テ之レヲ以テ世ニ誇リ人ニ称セラレントスルカ如キ固ヨリ其真意ニ非サルベシ然リ然レトモ女史カ多年一日独リ吾カ海軍下士卒ノ為メニ尽瘁スル此ノ如ク吾カ下士卒カ之レニ依リ受クル処ノ便宜ト智識此ノ如ク大ナルヲ思フニ至リテハ之レニ対シテ適宜謝意ヲ表スルノ極メテ穩当ナルヲ覺エ曩キニ吾カ水交社長ノ名義ヲ以テ襟飾及カフスボタンヲ贈呈セラレタルコトアリ而カモ女史直ニ之レヲ實用ニ供セス宛然一個ノ紀念章トシテ毎ニ之レヲ胸間ニ挟ミ自ラ称シテ是レ無上ノ光榮ナリト嗚呼女史ノ熱誠真事夫レ此ノ如シ願クハ篤ト御詮議ノ上適宜ノ方法ヲ以テ女史積年ノ功勞ヲ表彰セラレント希望ニ堪ヘス而シテ之レヲナスノ方法ニ至リテハ頗ル多々ナルヘシト雖モ若シ夫レ幸ニシテ以上女史カ帝國ノ為メニ尽力セル功果ノ天聰ニ達スルヲ得テ賜フニ宝冠章ヲ以テセラレ要路ノ高官ヨリ之レニ対スルノ謝辭ヲ贈ラルルカ如キアラハ是レ極メテ高尚ナルモノト認ム

右謹テ上申仕候也

明治三十五年九月二十九日

英国公使館附武官

海軍大佐 玉利親賢 (印)

特命全權公使子爵 林董殿

すなわち、一度でも英国に渡航したことがある日本の海軍軍人なら

ば全員がマクリーン女史の名前を知っているというほどに、その名前は海軍内に広まっていた。英国で多数の水兵に示した親切は筆舌に尽くしがたく、特に、エドワード七世戴冠式参列のため到着した浅間・高砂の二つの軍艦に対して彼女が与えた便宜には、乗組員の全員が感謝したという。マクリーンは当時すでに七〇歳を超えていながら、交通量の多いロンドンを自ら数百の水兵を率いて何マイルも歩いて案内したと記されている。

マクリーンはしばしば自著や雑誌に、日本水兵の謙譲や愛国心を賞賛する文章を書いて紹介したという。また、水兵の支援に便利だとの理由から、わざわざロンドン市外のテイルベリーに住居を移した。そして自らを「Japanese Soldiers' Friend」と称し、日本海軍の水兵たちは彼女を「Dear Mother」と呼んでいた。

玉利武官が述べるところによると、マクリーンは敬虔なキリスト教徒であったが、日本水兵に対する親切心はただ慈愛の信念から湧き出たものに違わず、社会に誇りたいとか人に褒められたいとかいったことは考えていない無私の奉仕者である。それだからこそ、何年もの間日本水兵のために尽くしたことで、水兵たちが受けた便宜の大きさに対して感謝を示すことが必要だと主張する。水交社から襟飾りとカフスボタンをプレゼントされ、マクリーンがそれらを最高の荣誉として胸に飾っていたというエピソードも紹介されている。

なお、玉利武官の推薦状で言及されている「時事新報紙上J. K. 生遭英艦航海記水兵ノ母ナル記事及日本ニ水兵ノ母ナキヤノ社説」も、

推薦状の別紙として外務省記録に綴られており、マクリーンの経歴を知る手がかりとなる（後述）。

叙勲の手続きがスムーズに進んだ背景として、当時の在英大使館において公使と武官との関係が極めて良好であったことも一つの要因であったと考えられる²⁾。とりわけ玉利武官は林駐英公使からの信頼が篤かったとされており、また史料にもあるとおり、林公使自身もマクリーン女史の功績について確認し、よく認識するところだった。日英同盟による日英親善気運と、日露両国の開戦ムードが刻一刻と高まる情勢において、海軍の士気向上や英国での軍艦碇泊地での慰安は重要な課題であり、マクリーン女史の献身が大きく裨益したと思われる。

二 「日本水兵の母」像の形成

明治期日本海軍の人士に慕われて叙勲にまで至ったマクリーン女史とはいかなる人物であったのか。その人生の全貌を伝記的に語るまでの材料はないが、女史が日本水兵に寄せた厚誼に関連した逸話を、日本の文献の各所に見つけることができる。以下では、新聞や書籍でどの言及を中心に、日本とマクリーンとの関わりや、日本でマクリーンがどのように語られたかを瞥見し、「日本水兵の母」像がどのように伝えられているかを追ってみた。

まず、先述の叙勲関係外務省記録に収録されている玉利武官推薦状

に付属した『時事新報』と『日本新聞』には、水兵の支援を開始する以前のマクリーンと日本との関わりを示す若干の記述がある。

『時事新報』の記事は、マクリーン女史が明治の初年より日本に滞在したが、どういった経緯で海軍との密接なつながりを有するようになったかを知る者は稀だと述べているにすぎない。

『日本新聞』の記事で、時事新報の不明部分を補うことができる。同記事によれば、マクリーンは一八七三(明治六)年に日本へと渡航し、九年後に帰英した。来日する以前は中国大陸に滞在していたが、言葉が不便であったことと、中国で病気に罹ったことから日本に転じた。その際に、日本の温和な気候と清浄な空気のために健康を回復できたことで、日本には恩義があると述べたという。記者はこうした経緯が日本人を愛する動機になったと推測している。同記事の執筆当時、マクリーンは最晩年であったが、再度日本に渡航して横須賀や佐世保などの軍港をめぐり、許多の水兵に会うことを希望していたという。マクリーンが日本水兵を対象として支援を始める決定的なきっかけは充分にはわからないが、その背景として、この時期、ロンドンにおける日本人支援コミュニティが萌芽しつつあったことは注目に値する。その端緒は一八九六(明治二九)年の日本郵船による欧州航路設立であり、設立当初からロンドンにおける日本人船員への配慮が行われていたのである。そこで日本人船員の世話係として、かつて日本で宣教師をしていた経緯からマクリーンがその役割を担ったようである。日本郵船の船が到着すると、マクリーンはチズウィックの船員宿

舎で多くの時間を過ごしたという。なお、一八九八年頃からは、故郷を離れた人々に精神的な安らぎを与え、キリスト教を広めるために、宣教団体によって日本船員クラブが設立された。このクラブはエドワード・ピッカーステス夫人によって設立され、日本郵船の初代ロンドン支店長であったジェームス船長や、日本の旅行記で知られるイザベラ・バードもクラブ設立の支援者として名を連ねていたという。^③

「日本水兵の母」は、当時のジャーナリズムに時折採り上げられる素材となっていたようで、新聞には他にもマクリーンの動向を伝える記事が点在する。例えば、一九〇三(明治三六)年九月七日の『大阪朝日新聞』には、「日本海兵の母：英のマクリーン嬢」と題して、日本海員掖済会総裁の有栖宮から有功賞を受けたことに対し、マクリーンからの感謝状が送付されたという記事が掲載された。また、一九〇四年八月八日の『日本新聞』には、「日本水兵の母危篤」と題して、マクリーンが危篤に陥ったとの記事もみられる。^④

マクリーン女史が日本水兵たちに与えた便宜の全ては明らかではないが、特に人々に印象を残したのは一九〇二(明治三五)年七月に軍艦高砂及び浅間が英国に立ち寄った際の熱心な案内ぶりだったようである。先の玉利武官の推薦状をはじめとして、残された史料のほとんどにその記述があることから、当時の海軍内では語り草になっていたと見受けられる。浅間、高砂両艦はエドワード七世の戴冠式にあたって派遣されたもので、外務省記録にも多くの記録が残されている。^⑤ また、防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵の史料にある、明治三五

年八月に提出された軍艦浅間の英国回航記事にもマクリーンの名前が記録されている。⁽⁶⁾

小笠原長生述『日露戦争軍事談片』(一九〇五年/明治三八年)に「日本水兵の母マクレン女史」という項目があり、マクリーンの功績が詳細に述べられている。その中に、日本水兵の母としてのマクリーンの存在を象徴的に示すエピソードが含まれている。日露戦争における第三回の旅順港閉塞作戦の際、残念ながら兵員に多数の戦死者を出したが、そのうちの一人の遺体の着衣から、マクリーン女史が贈った花形に訓戒の言葉を書き連ねた飾り物が発見されたという。これを当時の状況を記した手紙に同封して艦船千代田の艦長からマクリーンに送ったが、残念ながらその手紙が届く前に、マクリーンは世を去ったのであった。小笠原長生は、他のいくつかの著作でもマクリーン女史について触れている。⁽⁷⁾

また、マクリーンの行いは、倫理訓話や女子の修養の模範として採り上げられることもあった。早くは先の『時事新報』の記事において「自今東洋の海軍国たらんとする日本に所謂水兵の母たる一個のマグレン嬢を見出すを得ざる誠に痛嘆の極に非ずや」と結んでいることは、日本人女性の倫理観と比較して、模範とする意図がみえる。

もつとも、マクリーン女史の行為が道徳的な模範となるのはもっぱら彼女の死後数年経つてからであり、例えば下田次郎『新女訓』(一九〇六年/明治三九年)、中澤忠太郎『家庭教育 女子の修養』(一九〇七年/明治四〇年)などはその典型である。後者においては「日

本水兵の慈母と称せられたる、英国の老嬢、マクレーン氏(先年死去せられたる人)は、女子には愛情と、熱情がなければならぬとて、自ら率先して、自家自国の者のみか、外国人までをも愛護した人である」(傍線原文)として賞賛されている。中島徳蔵『実践倫理講話』(一九一〇年/明治四三年)にも、日本人が名譽心とする善行を外国人が愛でいうという事例のひとつとしてマクリーンが取りあげられている。同著はマクリーンの行動について、「心から日本水兵の為に尽し、水兵が行くことが前以て分ると、埠頭へ迎に来る、宿所へ連れて行く、所々の案内をする、病気に罹れば看病もする、慰めても呉れる。其れは其れは偶から偶まで届いた世話の仕方であるといふ」と、その徹底ぶりを評価している。

このようにマクリーンは、海軍内での評判を超えて、「水兵の母」として自国人と外国人とを分け隔てなく愛した同時代の模範的偉人としての評価を受け、その生き様が倫理修養の教材となつていったことがわかる。

もうひとつ逸話を紹介しておく。熊本洋学校、同志社英学校を経て牧師として活動していた原田助は、一九〇〇(明治三三)年の滞英中にマクリーン女史と交流があった。原田は、マクリーンとともにティルベリーの海員病院に日本水夫を見舞つた際、その若い水夫がマクリーンに向かつて「おつかさん」と言いながら落涙したのを見て、マクリーンがいかに日本の海員に愛されていたかを知つたという。これはマクリーン女史をめぐるもつとも感動的なエピソードのひとつだと

思われる。そしてこれに続けて、原田はマクリーンが日露戦争の開始後に日本の水兵に向けて送った以下のような書簡を紹介している。⁸⁾

現役に在る三万のスィヘイへ

遠く朝鮮、満洲、支那に在る我が愛する小供等よ。我が心は日々汝を慕ひ、我は精神に於て汝等の中に住む、戦争は残酷なるものにして吾人が愛して日々善なれかしと祈る人々の尊き生霊を惜気も無く奪去るものなり、日本に漫遊せよといふ親切なる汝が招待を受けし以来、我は激動を覚えぬ、未だ汝等に手紙を出すには至らざりしかど、我は倫敦駐在海軍武官を経て汝が親切を容諾し、英国各島内到處に幾多の心と手とを動かして我が愛する小供の^(ママ)ために祈り、且つ我を扶けて日本に対する吾人が愛を物質的の形を以て表顕するに於て、上帝が善しと見給ふ可き準備をなすことゝなれり、我は富まずと雖も、然れども幾百の友は日本に対する我が主義労働を愛し、且つ嘆称するが故に、我は恰も部下に命令を発する提督の如し、何となれば彼等は凡て美しき袋を縫ひ以て我を扶くることを好み、又此外幾多の友も此の紀念旅行の紀念として美しく綴れる書物を我に贈れり。

我は未だ汝の如き親切を知らず、我が友は汝の為せる手配を聞く度に驚きて嘆賞せざるもの無し、勿論今日は斯くの如きことを語る可きに非ず我は目下此のこと並に日本に就き大に筆を執りつゝあり、遠からず世間に発表せらる可し。

全英国は日本に対し同情を表す、是れ驚く可きことなり、吾人の陸

海軍は水兵、兵士としての汝に対し、唯二箇の意見を有するのみ「凡て勇敢にして恰当なる人」是れなり、我は親しく多数の将校並に其夫人を知るが故に、我は我が言ふところのものを知る、我は勇敢にして然かも親切なる人を愛し、殊に過去に於て戦ひ今亦戦ひつゝある人を愛す

(中略)

汝等は既に得たる鴨緑江並に旅順口の大勝に対し、祝贺せられざる可からず我は将校兵士に依りて日本が受けたる損失を悲み屢々疑ふらく、我が愛する子供又将校中に国家の為に戦死したるものあるにあらざるやを。我は彼等に対しては再び天上に於て相合せんことを希望し、残余のものに対しては武運目出度勝利を齎らして恙なく帰来せんことを希望す。汝等の中苟くも聖書を有するものは、詩篇第九十一篇及び百七篇を読み、身心二つながら之を上帝の保護に委す可し、上帝は汝等の身辺にあり、彼を信賴するものゝ祈りを聞き玉ふ、彼は天地万物の造主にして彼の心は母のそれによく似たり「我が子よ汝の心を我に与へよ」といふ

我が大準備成るの日、汝等は再び日本に帰来し、正当なる勝利の結果を楽みつゝあらんことを希望す神よ常に汝等を守り玉へ。我が愛する子供等よ

汝等の愛する エム、マクリーン

三 マクリーン女史の無縁墓の帰趨

「日本水兵の母」として、海軍関係者に愛され、また明治末期の日本においてこれほど認知されたマクリーン女史の墓が、長い年月のうちに忘れられてしまったことは残念であった。おそらく子孫もおらず、日本からも旧海軍関係者が世を去るに従って、マクリーン女史の記憶も風化していったと思われる。

しかし、その後の在英大使館や墓地管理人の尽力により、令和三(二〇二二)年に至って、マクリーン女史の関係者に連絡をとることができたという。これにより、この墓は撤去されることがなくなった。それに加えて、墓地管理人のさらなる厚意により、在英大使館を通じて、外交史料館所蔵のマクリーン女史関係史料(先述の叙勲関係記録)をロンドンの地元アーカイブに登録したいとの申し出を受け、目下調整中である。日英交流の草の根として活動したマクリーン女史の墓は守られ、再びここに日の目を見ることとなった。本件でロンドンの郊外にたたくむ無縁墓を救済するに至ったのは、英国に墓が残され、墓に情報が残され、外交史料館に関係史料が残っていたという条件がそろっていたためである。これらの条件がひとつでも欠けていればそのような事は運ばなかったかもしれない。日英交流の一場面を地下深く埋もれさせてしまうことになっていたかもしれない。改めて、記録を残すことの重要性を思っ身が引き締まる。そしてこの機会に、百年以上前にマーガレット・マクリーン女史が示した日本人に対する厚誼

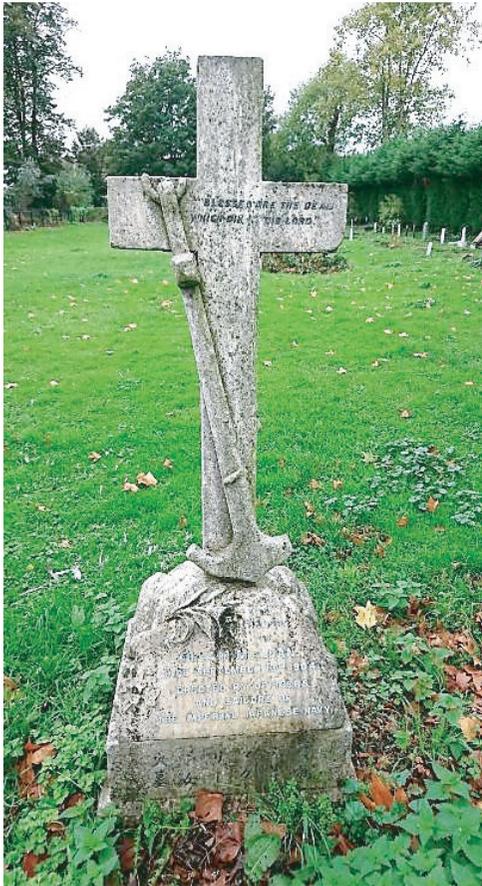
を謝しつつ、この墓が再び無縁状態になることのないよう、後世へと記憶を残すべく、事実関係を記録しておこうと考えた次第である。無縁墓への対応にあたった墓の管理人、在英大使館の職員、外交史料館にて史料の読解を支援してくれた職員など、本件の全ての関係者の尽力に敬意を表したい。

(文責 濱田)

注

- (1) 国立公文書館所蔵「叙勲裁可書明治三十五年・叙勲巻六 外国人」(ア ジア歴史資料センターレファレンスコード A10112552800)
- (2) 外務省百年史編纂委員会編『外務省の百年』下巻(原書房、一九六九年) p1430
- (3) Keiko Itoh“*The Japanese Community in Pre-War Britain: From Integration to Disintegration*”(『戦前の英国における日本人コミュニティ: 形成から分裂へ』) p26
- (4) 『新聞集成明治編年史』第二二巻(財政経済学会、一九三六年) p105及び p280
- (5) 外務省記録「各国元首及皇族慶賀雑件 英国之部」「エドワード」第七世戴冠式挙行之部」(G.4.6.3-12-2)や、外務省記録「回漕碇泊関係雑件」第一巻(3.6.4.8)など。なお後者に「浅間高砂両艦英国へ派遣の際各港にて受けたる厚意に対し海軍大臣より謝意申入の件」という項目があるが、文書中にマクリーンの名前を見つけないことはできなかった。

- (6) 防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵「遣英軍艦浅間英国回航記事第八回報告」(アジア歴史資料センターレファレンスコード C11081092600)
- (7) 例えば小笠原長生『随筆 春うららか』(実業之日本社、一九三一年)、『英皇戴冠式参列渡英日録』(軍事教育会、一九〇三年)にマククリーン女史の記述がみられる。
- (8) 原田助『信仰と理想』(警醒社、一九〇九年)。原田助は、後年在パチカン大使やイタリア大使を務めた原田健の父。



マーガレット・マクレーン女史の墓
(在英国大使館提供)